充実の8日間

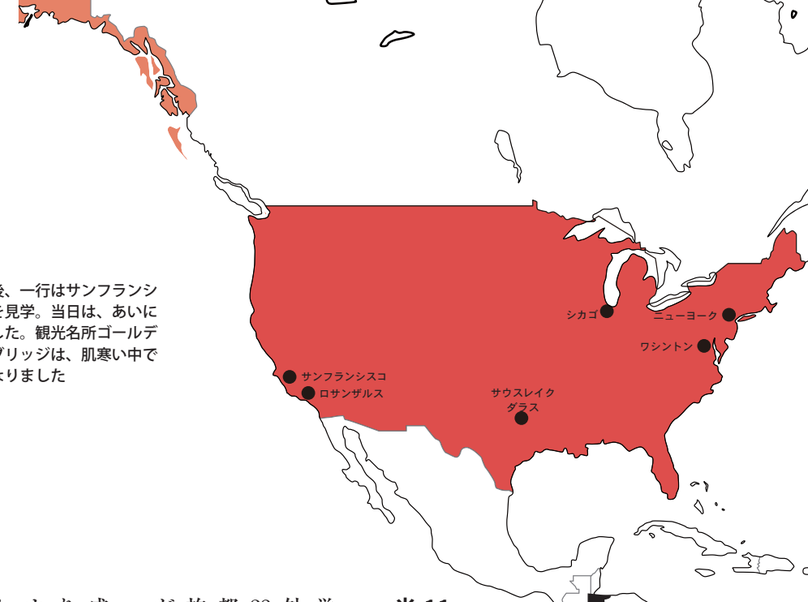
11回目を迎えた海外派遣 米国サ市へ4人を派遣

海外での生活を体験し、語学や異文化を学ぶ「青少年海外派遣事業」は3月21日から28日までの8日間、国際姉妹都市サウスレイク市などで実施され、本市内の中高生4人が参加した。

この事業は、合併直後の平成17年から毎年実施しており、米国、オーストラリア、カナダの3カ国に中高生を派遣している。

サウスレイク市などを訪れたのは、佐沼高2年(派遣時1年)の熊谷日和さん＝迫町錦東＝、登米高2年(派遣時1年)の芳賀帆歩さん＝豊里町横町＝、佐沼中3年(派遣時2年)の佐藤将幸君＝迫町萩洗＝、石越中3年(派遣時2年)の三浦咲紀さん＝石越町長根＝の4人。市青少年海外派遣受入事業実行委員会の佐々木清公実行委員長が引率した。

米国到着後、一行はサンフランシスコ市内を見学。当日は、あいにくの雨でした。観光名所ゴールデンゲートブリッジは、肌寒い中での見学となりました



人として成長できる よいきっかけ

佐々木清公さん(72)
海外派遣事業団長

現地に着くまでは、不安そうにしているのですが、帰国するときには生き生きとして、目が輝いています。

短期間でも、海外で生活することで、言葉や文化だけではなく、自分を見つめ直し、生き方や考え方を学んでいます。言葉は違えど、私たちは地球に住む「人間という一つの民族」。つたない英語でも、相手のことを考え、本気で伝えようとすれば、分かりあえるものです。こういったことが自信につながったり、よい刺激になったりしているのでしょう。

海外での体験は、お金では買えない貴重なもの。多くの子どもたちがこの事業を通して、大きく成長することを願っています。

海外派遣事業には、合併前の登米町時代から30年ほど携わっています。

この事業のよいところは、参加した子どもたちが大きく成長して帰ってくることです。

サウスレイク市役所で市長を表敬訪問。市長はおそろいの仮面を準備して待っていました

派遣された生徒たちは、事前に英会話やサウスレイク市の文化や生活習慣、ルールやマナーなどの研修を受けた。

肌で感じた米国暮らし 8日間で大きく成長

一行は3月21日に登米市を出発。成田空港から約17時間かけて、サンフランシスコへ。長旅の疲れも見せず、ロンバートストリートやツイン・ピークス、ゴールデンゲートブリッジなどを見学した。翌日もサンフランシスコ市内を見学し、23日、ホームステイ先のサウスレイク市に移動。

サンフランシスコから、国内線で6時間ほど移動しテキサス州ダラスへ。長旅で疲れが見え始めた生徒たち。そんな彼らの疲れは、ホストファミリーの温かい出迎えに一瞬で吹き飛んだ。空港から車で1時間ほど移動し、サウスレイク市へ。それぞれのホストファミリー宅で、もてなしのパーティーが開かれた。

サウスレイク滞在中は、小学校に訪問し、現地の子どもたちと交流を深めたほか、市役所や消防署などの公共施設を見学。同じ公共施設でも、アメリカと日本では、仕事の手順や役割などが違うことを肌で感じた。

3月28日に帰国した4人。慣れない土地で慣れない英語。風習も生活様式も全てが違っていた。「早く帰りたい」と思っていたのではないだろうか。その質問に、生徒4人は口をそろえる。

「まだもう少しアメリカにいたかった」

彼らは8日間で大きく成長し、その目は輝いていた。

1ダラス空港で、ホストファミリーと合流。一行を温かく出迎えてくれました 2フィッシャーマンズワーフに隣接するピア39。ピアは埠頭を意味します。埠頭の桟橋には多くのアザラシが群れています 3サウスレイクでは小学校を訪問。児童たちと交流を深めました 4サンフランシスコは坂のまち。ケーブルカーが現役で活躍しています 5サウスレイク消防署では、防火衣を着用。体の大きい米国人用なので、小柄な日本人女性が着るとこのとおり